5歳児から6歳児のイメージにおける 初発行動の心理学的解析

緒方 章嗣

The psychological analysis of the first action in the image in 5 - 6 years old child.

Shouji Ogata

Abstract

When an infant (5-6 years old child) made a thing an image as a first action of the drawing, I examined whether the image has a morphological characteristic or a characteristic of psychology caught as a color goes ahead, and considered the mechanism of the drawing action outbreak.

In addition, I examined whether or not I should take it in as one of the education methods after I grasped and understood the characteristic of the first action in the image drawing of the infant.

I picked ten questions at the first investigation (2001).

The infant whom I intended for was 60 in total from 5 years old three months to 6 years old two months.

I picked 14 questions at the second investigation (2002).

The infant whom I intended for was 90 in total from 5 years old ten months to 6 years old 11 months.

I performed the investigation each of them.

For example, I asked them when they imagine a mandarin orange whether they imagine the form of it or the color of it first of all.

And I added up the answer.

The standard of the questions which I used so that they chose a form or color was chosen in the thing which an infant got close and observed for interest in particular in their dayly life.

Keywords

Image First action Morphological characteristic Psychological characteristic by color Education method

キーワード

イメージ 初発行動 形態的特質 色彩の心理的特性 描画教育

目的

保育現場での描画教育の内容は、幼児期の知覚能力や運動能力の発達過程を考慮しておこなわれている。また、その殆どがイメージ描画を主流とし、写生画や模倣画は極少ない。

しかし、実際の保育現場では、幼児のイメージ描画に対する教授に関して保育者側の主観に基づき一方的な導入法に偏りがちになる傾向が見受けられ、幼児がイメージ描画する際の初発行動を考慮した上で保育者の教授がおこなわれていない場合がある。

このことから、この研究では、幼児(5歳児~6歳児)が初発行動として最初にものをイメージ化する時、そのイメージは、形態的特質を有するのか、あるいは、色彩としてとらえる 心理的特性を先行させるかの描画行動発生のメカニズムについて分析と考察をおこなうことにより、保育者がこの初発行動の特徴を把握し理解して、幼児のイメージ描画に際しての教授方法の一つとして取り入れていくことを目的とした。

方法

〔調査1〕

被験児

3ヶ所の保育園の幼児(年長児)、5歳3ヶ月から6歳2ヶ月までの男児30名、女児30名、 総計60名である。

調査対象とする被験児を年長児に限定した理由は、言葉による質問内容の説明に関しての理解力をもつことを考慮したからである。

実施方法

調査の実施方法は、被験児1名ずつに対して、たとえば、みかんについては「みかんは形を 思いますか、色を思いますか。どちらですか」と質問し、「最初に形態と色彩のどちらをイメー ジするか」を答えるように教示した。

イメージの分析

形態か色彩かを分類するのに用いた項目は、果物2項目(みかん・バナナ)、野菜2項目(トマト・きゅうり)、花2項目(あさがお・ほまわり)、昆虫2項目(天道虫・アリ)、動物2項目(ぞう・キリン)の合計10項目である。

その基準は、幼児の日常生活の中で特に興味をもって親しみ観察しているものを基準として 考慮し、被験児にとって明確に形や色彩のイメージ化しやすいものを選択した。

[調査2 (2002)]

被験児

3 ヶ所の保育園の幼児 (年長児)、5 歳 10 ヶ月から 6 歳 11 ヶ月までの男児 45 名、女児 45 名、総計 90 名。また、調査対象とする被験児を年長児に限定した理由は、調査 1 と同様である。

実施方法

調査の実施方法は、調査1と同様に、被験児1名ずつに対して、たとえば、りんごについては「りんごは形を思いますか、色を思いますか。どちらですか」と質問し、「最初に形態と色彩のどちらをイメージしたか」を答えるように教示した。

イメージの分析

形態か色彩かを分類するのに用いた項目は、果物 2 項目(りんご・ぶどう)、野菜 2 項目(だいこん・にんじん)、たまご 1 項目、おむすび 1 項目、虫 2 項目(カタツムリ・カブトムシ)、動物 3 項目(うさぎ・いぬ・ねこ)、天体 3 項目(つき・星・太陽)の合計 14 項目である。その基準は、調査 1 と同様である。

結果と考察

表1は被験児60名の各項目の形態と色彩に関してのイメージ化における初発行動を表したものである。

それによると、男児女児合計 60 名の各項目での形態と色彩の C R 検定の結果は、トマト、 P<.05、 <u>あさがお</u>、P<.05、 <u>ひまわり</u>、P<.05 の 3 項目で有意差があり、その他の 7 項目では 有意差が無い。また、男児女児 10 項目の合計では全ての項目に有意差が無い。

男児についての形態と色彩のCR検定の結果は、Aかん、P<.05、P<.05、P<.05、Aさがお、P<.05、A05のA項目であり、その他のA07日では有意差がない。また、A10項目の合計においては有意差がない。

女児についての形態と色彩のCR検定の結果は、10項目すべてにおいて有意差が無い。

次に、男児と女児間の形態と色彩の X^2 検定の結果は、 \underline{A} かんのみがP<.05であり、その他の9項目では有意差が無い。

以上の結果から、男児女児全体について言えば、対象項目である 10 項目のうち 7 項目に関しては形態と色彩の間に有意差が見られない。

このことは、これらの7項目では幼児の日常生活でのイメージの形成時において、幼児(5歳児~6歳児)に形態と色彩のどちらかを選択させる要素となる項目の特質的な特徴のバランスがイメージを偏らせていないことの原因であると考えられる。よって、幼児はこれらの7項目に対しては拮抗したイメージを感受していることが推察される。有意差を示す3項目においては、トマトについては5%水準で形態が有意、<u>あさがお</u>、<u>ひまわり</u>に関しては、色彩が5%水準で形態より有意である。

このことは、幼児は<u>トマト</u>を日常生活において観賞する機会が少ないことが、その色彩に刺激を受ける要素に乏しいことで、形態が色彩より優先してイメージ化されるのに対して、<u>あさ</u>

<u>がおとひまわり</u>は、幼児の各家庭や保育園で栽培される機会が多く、これらは色鮮やかな花を主とする観賞用であるために、その色彩のイメージは、繰り返し観ることによって強く記憶されることで、幼児は形態より色彩の方を優先させてイメージしていると考えられる。

次に、男児では10項目のうち6項目に有意差がみられない。このことは、男児女児合計の結果の理由と同様なことが原因であると考えられる。また、5%水準の有意差がある4項目のうち<u>みかん、あさがお、ひまわり</u>は、色彩を優先してイメージし、<u>トマト</u>では形態を優先してイメージしているが、とくに、<u>みかん</u>は形態、30%で同じような形態の特徴をもつトマトの形態、70%より40%も少なくイメージしていることは生活経験の違いであると推定される。

女児では形態と色彩で10項目全てにおいて有意差はみられない。このことは、全ての項目においてイメージの形成に大きな偏りがないことを示しているといえる。

男児と女児の比較では、10項目のうち、<u>みかん</u>を除き、9項目において有意差がみられず、これらの項目においての形態と色彩ではイメージが固定化していないことがわかる。また、<u>みかん</u>については男児は5%水準で形態より色彩が70.0%と高く、女児のほうは56.7%と形態が高い。よって、女児は男児より形態と色彩のイメージをあまり偏りなく感受していることがわかる。

耒 1	幼児のイ	メージにお	ける初発行動	の形能と角彩
<i>-</i> ₹	スルタピリナイ	メーンにわ	V 1 / 2 × / 1 年 1 1 里 / 1	[(/)][(A)][(B) [C] [H] [A] [A]

男児		女児		合計	
30		30		60	
5.6		5.8		5.7	
3	. 3	3.0		3.3	
形態%	色彩%	形態%	色彩%	形態%	色彩%
30.0 *	70.0 *	56.7	43.3	43.3	56.7
40.0	60.0	50.0	50.0	45.0	55.0
70.0 *	30.0	60.0	40.0	65.0 *	35.0
56.7	43.3	53.3	46.7	55.0	45.0
30.0 *	70.0	40.0	60.0	35.0 *	65.0
26.7 *	73.3	43.3	56.7	35.0 *	65.0
43.3	56.7	66.7	33.3	55.0	45.0
50.0	50.0	56.7	43.3	53.3	46.7
56.7	43.3	60.0	43.3	58.3	41.7
46.7	53.3	40.0	40.0	43.3	56.7
45.0	55.0	52.7	60.0	48.8	51.2
	5 3 形態% 30.0 * 40.0 70.0 * 56.7 30.0 * 26.7 * 43.3 50.0 56.7 46.7	30 5.6 3.3 形態% 色彩% 30.0 * 70.0 * 40.0 60.0 70.0 * 30.0 56.7 43.3 30.0 * 70.0 26.7 * 73.3 43.3 56.7 50.0 50.0 56.7 43.3 46.7 53.3	30 5.6 3.3 3 形態% 色彩% 形態% 30.0 * 70.0 * 56.7 56.7 40.0 60.0 50.0 70.0 * 30.0 60.0 56.7 43.3 53.3 30.0 * 70.0 40.0 26.7 * 73.3 43.3 43.3 56.7 66.7 50.0 50.0 56.7 56.7 43.3 60.0 46.7 53.3 40.0	30 30 5.6 5.8 3.3 3.0 形態% 色彩% 形態% 色彩% 30.0 * 70.0 * 56.7 43.3 40.0 60.0 50.0 50.0 70.0 * 30.0 60.0 40.0 56.7 43.3 53.3 46.7 30.0 * 70.0 40.0 60.0 26.7 * 73.3 43.3 56.7 43.3 56.7 66.7 33.3 50.0 50.0 56.7 43.3 56.7 43.3 60.0 43.3 46.7 53.3 40.0 40.0	30 30 5.6 5.8 5 3.3 3.0 3 形態% 色彩% 形態% 色彩% 形態% 30.0 * 70.0 * 56.7 43.3 43.3 40.0 60.0 50.0 50.0 45.0 70.0 * 30.0 60.0 40.0 65.0 * 56.7 43.3 53.3 46.7 55.0 30.0 * 70.0 40.0 60.0 35.0 * 26.7 * 73.3 43.3 56.7 35.0 * 43.3 56.7 66.7 33.3 55.0 50.0 50.0 56.7 43.3 53.3 56.7 43.3 60.0 43.3 58.3 46.7 53.3 40.0 40.0 43.3

^{*} p<.05

表 2 は、表 1 と同様にして、被験児 90 名の各項目の形態と色彩に関してのイメージ化における初発行動を表したものである。

それによると、男児女児合計 90 名の各項目での形態と色彩の C R 検定の結果は、<u>おむすび</u>、 P<.01、<u>カタツムリ</u>、P<.01、<u>月</u>、P<.01 の 3 項目で有意差があり、その他の 11 項目では有意 差が無い。また、男児女児 14 項目の合計では全てに有意差が無い。 男児についての形態と色彩のCR検定の結果は、<u>りんご</u>、P<.05、<u>おむすび</u>、P<.01、<u>カタツムリ</u>、P<.01、<u>月</u>、P<.05、の4項目で有意差があり、その他の10項目では有意差が無い。 女児についての形態と色彩のCR検定の結果は、<u>おむすび</u>、P<.05、<u>カタツムリ</u>、P<.01、の2項目で有意差があり、その他の12項目で有意差が無い。

次に、男児と女児の間の形態と色彩の X^2 検定の結果は、14 項目の全てにおいて有意差が無い。

以上の結果から、男児女児全体について言えば、対象項目である 14 項目のうち 11 項目に関しては形態と色彩の間に有意差が見られない。このことは、これらの 11 項目では幼児の日常生活でのイメージの形成時において、幼児に形態と色彩のどちらかを選択させる要素となる項目の特質的な特徴のバランスがイメージを偏らせていないことの原因であると考えられる。

このことから、幼児はこれらの11項目に対しては拮抗したイメージを感受していることが推察される。<u>おむすび、カタツムリ、月</u>の3項目については1%水準で形態が有意である。このことは、<u>おむすび</u>は、形態が三角形や丸形で、幼児にとっては視覚的に理解しやすい単純で明解な形をしているが、色彩面では色彩の変化に乏しいか、無彩色で色あいが無く色彩の刺激を受けないからである。次に、<u>カタツムリ</u>は、丸く可愛らしい形態が幼児に親しまれているが、色彩では彩度が低く、模様の変化も余り無いからである。また、<u>月</u>は、明確な形態で夜に現れることにより、他の天体の太陽や星より観察によって明確に形態をとらえ易いことである。

表2 幼児のイメージにおける初発行動の形態と色彩

性別	男児		女児		合計		
人数	45		4	45		90	
平均年齢	6.4		6.	6.4		6.4	
標準偏差	3.	7	3.4		3.5		
対象項目	形態%	色彩%	形態%	色彩%	形態%	色彩%	
1. りんご	33.3 *	66.7	46.7	53.3	40.0	60.0	
2. ぶどう	55.6	44.4	55.6	44.4	55.6	44.4	
3. だいこん	57.8	42.2	48.9	51.1	53.3	46.7	
4. にんじん	35.6	64.4	51.1	48.9	43.3	56.7	
5. たまご	48.9	51.1	64.4	35.6	56.7	43.3	
6. おむすび	71.1 **	28.9	66.7 *	33.3	68.9 **	31.1	
7. カタツムリ	73.3 **	26.7	73.3 **	26.7	73.3 **	26.7	
8. カブトムシ	53.3	46.7	46.7	53.3	50.0	50.0	
9. うさぎ	42.2	57.8	40.0	60.0	41.1	58.9	
10. いぬ	40.0	60.0	44.4	55.6	42.2	57.8	
11. ねこ	46.7	53.3	44.4	55.6	45.6	54.4	
12. 星	44.4	55.6	42.2	57.8	43.3	56.7	
13. 月	66.7 *	33.3	64.4	35.6	65.6 **	34.4	
14. 太陽	55.6	44.4	46.7	53.3	51.1	48.9	
合計	51.7	48.3	52.5	47.5	52.1	47.9	

^{**} p<.01, * p<.05

よって、これらのことが、幼児が色彩より形態のイメージを優先させる要因としてとらえることができる。

次に、男児では14項目のうち10項目に有意差がみられない。このことは、男児女児合計の結果の理由と殆ど同様なことが原因であると考えられるが、5%水準の有意差があるりんご、月では、りんごは色彩を優先してイメージし、月では形態を優先してイメージしている。特に、りんごは形態、33.3%で、同じような丸い形態の特徴をもつぶどうの形態、55.6%より22.3%も少なくイメージしていることは、双方の彩度において視覚的刺激の強弱の違いによるものと推定される。また、1%水準で有意差があるおむすび、カタツムリは前述と同様、色彩においての色あいや彩度が無いか低いために2項目とも形態を優先してイメージ化している。

女児では形態と色彩で14項目のうち、2項目の<u>おむすび</u>が5%水準、<u>カタツムリ</u>が1%水準で有意差があり、2項目とも男児と同様に形態を優先してイメージ化している。また、他の12項目に対しては形態と色彩においてイメージの形成に大きな偏りが無いことを示している。

男児と女児の比較では、14項目すべてに有意差がみられず、形態と色彩においてイメージ が偏っていないことがわかる。

最後に、幼児(5歳児~6歳児)のイメージ画における初発行動の調査1(10項目)と調査2(14項目)を総合した結果からは、男児女児全体で24項目のうち18項目で有意差が無く、他の6項目に有意差が認められた。よって、この時期の幼児が最初にものをイメージ化する時、その初発行動には形態と色彩で顕著に偏った特徴の要因をもつものを除き大きな偏りが無いことを示唆している。

また、この時期の幼児の特徴としては、初発行動として最初にものをイメージ化する時に形態もしくは色彩を優先したとしても、殆どの幼児は、イメージ描画を行う際において、描画するものの形態と色彩を瞬時に統合して描画していく能力を獲得していることが認められた。このことは、この時期の幼児は知能や知覚の発達によって、ものに対する表現の整合性を思考して描画していく能力を獲得していると言える。さらに、この時期は、Bruner. J(1996)のいう表象の映像的表象から象徴的表象へと表象能力が増大する移行期であり、抽象的であるイメージにおいても階層的思考や範疇的思考なども高められていることが要因として考えられる。

次に、保育者や教育者は、幼児に対する実践的なイメージ画の描画教育に際して、幼児のイメージ化における初発行動の特徴を把握し理解した上で、イメージ描画の導入や指導にあたる必要があると思われる。言い換えれば、保育者や教育者が幼児のイメージ描画の導入や指導にあたる際には、幼児がイメージ描画するものについて、形態や色彩で、指導者の個人的なイメージだけを基に偏った導入や説明をすることなく、幼児の描画対象となるものの形態と色彩の特徴を熟知した上で進めていく様な描画指導が必要とされることである。

女献

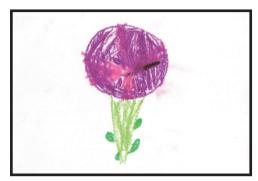
Bruner, J.S, Olver, R.R & Greenfield, P.M., 1966

(岡本夏木・奥村茂夫・村川紀子・清水美智子共訳、認識力の成長上・下 1975 1976) 緒方 章嗣・宮原 英種 2001 幼児のイメージにおける初発行動の心理学的解析 緒方 章嗣・宮原 英種 2002 幼児のイメージにおける初発行動の心理学的解析Ⅱ

資料

図1は、本研究の調査で得られた、幼児のイメージ描画(あさがお・ひまわり・カタツムリ)の事例である。

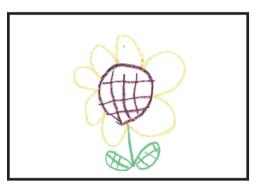
図 1



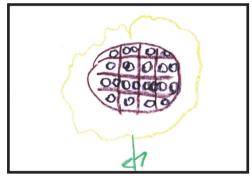
男児 6歳7ヶ月(形態)



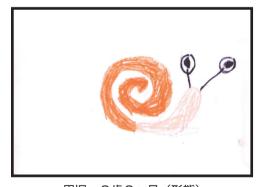
女児 6歳7ヶ月(色彩)



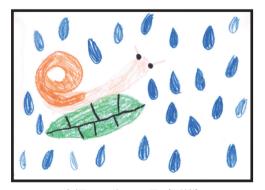
男児 6歳2ヶ月(形態)



女児 5歳11ヶ月(色彩)



男児 6歳6ヶ月(形態)



女児 6歳5ヶ月(形態)